事例No.	2877
公表年度	R5
団体の属性	指定都市
団体名	神奈川県川崎市、多摩区

事例区分	地域活性化

タグ	・地域運営組織 ・関係人口

事例種類	関係人口

事例内容・タイトル

事例５　神奈川県川崎市・多摩区ソーシャルデザインセンター その１、その2

出典

地域づくり人材の養成に関する調査研究会（第3回）

事例５　神奈川県川崎市・多摩区ソーシャルデザインセンター　その１

団体名	多摩区ソーシャルデザインセンター		運営形態	一般社団法人
活動範囲	所在市区町村全域			
中核を担う職員等	任用形態	その他（有志、ボランティア）	出身地	徳島県徳島市出身、中学生から川崎市在住
	年齢	40代		

【取組み概況】

○　多摩区6カ所で毎月1回開催される子ども食堂(約250名/月)の支援等を行い、活動の地域への浸透、新たな担い手の創出につなげている。特に学生によるボランティア参加が多く、学生組織として学生代表、副代表を設置しており、子ども食堂に関わっているスタッフを中心に、登戸・たまがわ運動会や約65,000名を集めた登戸・たまがわマルシェ等様々な大小の活動を通じて気軽に集える地域の居場所づくり（まちのひろば）を行っている。

○　開設以降、地域活動等の相談・活動支援に関する相談の受付（令和４年度は約140件）のほか、まちのひろばの創出を目的とした子ども食堂の立ち上げ（これまでに５か所を開設など）、新規活動団体への支援、イベント等を通じたネットワーク構築等の取組を行い、地域団体等と関係性を築くなど「多摩区におけるソーシャルデザインセンター開設案」に掲げる理念の実現に向け一定の成果が得られている。

【設立の経緯】

○　川崎市の「これからのコミュニティ施策の基本的考え方」（平成31年3月）において、多様な主体の連携により、**市民創発によって課題解決**する区域レベルの新たなしくみとして、各区にソーシャルデザインセンター（以下「SDC」という。）を創出することとなった。

○　多摩区役所では、平成31年4月に「これからのコミュニティ施策の基本的な考え方多摩区区域レベル取組検討会」を設置し、令和元年11月に多摩区における望ましいSDCの骨格を示す「多摩区におけるSDC開設案」を策定。

○　その後、**検討会に参加した区民を中心に**任意団体の運営組織を立ち上げ、令和2年3月に多摩区総合庁舎１階に**「多摩区SDC」**が開設され、同年８月には運営組織が法人化した。以降、メンバーの募集、受入により、立ち上げ時の13名から現在50名以上と大幅に増員されており、とくに大学生をはじめとする多くの**若い世代が活躍**している。

事例５　神奈川県川崎市・多摩区ソーシャルデザインセンター　その２

【行政との関わり】

○　多摩区役所においては連携協定を締結し、多摩SDCの取組に対し、**施設使用**や事業実施に係る**運営補助金の交付**、**広報の協力**、情報交換等による**伴走支援**を行っている。

【中核を担う者の状況】

○　元々、会社で多摩区と麻生区を中心に介護・保育などの地域に密着した事業などを経営しており、**「地域貢献ができないか」**と有志とNPO法人を設立し、子ども食堂や子育て支援を行っていたのだが、まちづくり協議会の役員から地域の寺子屋でのワークショップ（不登校にならないドッチボール講座）を依頼された際に**SDCの検討会への参加の誘いを受けた**ことがきっかけ。

○　区役所の旧喫茶室を活用し、SDCを開設することとなり、区内を回るなどして地域に聞き取りをするも何の活動を行うか決まらないまま**緊急事態宣言**が出たことで、集まったメンバーで不足している**マスクを作って**保育園等に渡す、コロナ禍でも働いている人達に向けて**ポケットティッシュ**に「皆さんありがとうございます」という**メッセージをいれて**1,000部ほど駅周辺で配る等の活動を行った。

○　緊急事態宣言明けからは、元々やっていた子ども食堂を多摩区に広げる話になり、タウン情報誌に広告を入れるとコロナ禍でボランティア活動がストップしていた影響もあり、手が空いている学生が15人ほど集まり、スタートした。

○　多摩SDCのスタッフは**学生が多い**。はじめは元々やっていたデイサービスでアルバイトをしていた大学生にこども食堂をやらないかと声をかけた。その大学生が地元の中学校のつながりでバスケットボールサークルを立ち上げ、その中から子ども食堂などボランティアを集めた。この地元のつながりで集める経験を生かし、同様の手法で多摩SDCの学生スタッフを集めた。特に**口コミによるものが大きい**。

○　人を集める上での法則として、友達が声がけをする、インスタを見る、ホームページを見る、タウンニュースに出ているなど、**公的なものを含む2つ以上の入口から情報が入らないと人が集まらない**ということがわかった。

○　今後の展望として、現在２つの仲間づくり（新たな担い手の発掘）に取り組んでいる。

①若者の発掘

子ども食堂やイベントへの参加などの活動を通じて地域にSDCの活動を少しずつ知ってもらえるようになり、学生ボランティアが継続して増えることや、中長期的には**携わった子どもたちが**中学生～大学生になったときに担い手となってくれたら良いと考えている。

②若者と一緒に同じ土俵で動ける中高年の担い手

中高年では、地域活動、市民活動に携わりたい人は多数おり、学生など若い世代が中心となり進めている活動を理解してくれる人を少しずつ集めている。**若者のバックアップ**をする上で、**貴重な人材**となっている。